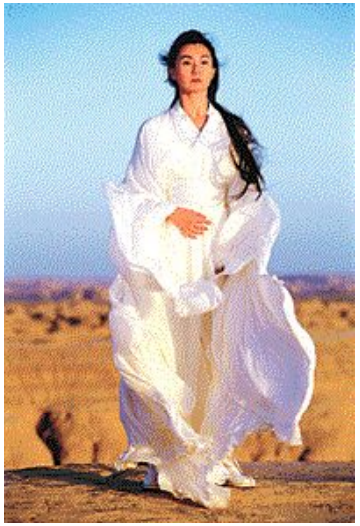
茜色の歌姫

第二部　大化の改新変



多武峰縁起絵巻

戊是歳、太子、奏請して曰さく、「冀はくば倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟を率いて、往きて倭飛鳥河辺宮に居します。時に、公卿太夫百官の人等、皆随ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨りたまはむと欲して、宮を山崎に造らしたまふ。

（『日本書紀』巻第二十五）

額田王、近江天皇を思ひて作る歌

君待つと　我が恋ひ居れば　我が宿の
簾動かし秋の風吹く

（『万葉集』第四巻）

第一章　讃良　649～650

暗い天井に近く、幅二尺（約60センチ）の太い梁に仰向けに身を縮め、亜那は身動きせず、息を殺していた。

飛鳥の山田寺。六年前、蘇我石川麻呂が建立した寺である。

石川麻呂は、四年前、すなわち板蓋宮で蘇我鞍作が討たれた際、同族を裏切って葛城皇子に与した。その功により右大臣となり、さらに蘇我の莫大な財を受け継ぎ、権勢を誇った。

その石川麻呂が、いまや逆賊として追いつめられている。

山田寺の内は、石川麻呂の一族、伴部や兵どもに満ち、境内は人馬のざわめきで騒がしい。本堂では、僧どもが、やがて押し寄せてくるであろう討伐軍との戦での勝利を祈念し、経文を誦している。

亜那が潜んでいたのは、寺の庫裏であった。三日前、石川麻呂らが到着した折り、甲冑や弓矢、剣や矛が所狭しと積み上げられていたが、今は、僅かに寺の調度等が置かれているばかり。

これが最後……。

亜那は口のなかで呟いた。

これを了えれば、吾は、土蜘蛛ではない。

一年前。すなわち、大化三年（６４８）。

蘇我鞍作と古人皇子が討たれた翌年、難波の長柄宮で行われた年賀の式で、豊日大王は、唐に習って初めて年号を採用し、大化一年とした。

その前年、大海人皇子と亜那との間に娘が生まれた。亜那は、箸墓の土蜘蛛の邑に住みつつ、時に許しを得て大海人皇子の住む河辺宮を訪ない、皇子と逢瀬を重ねていた。やがて子を孕んだ。大海人皇子にとって初めての子であったが、会うことはかなわなかった。亜那は、箸墓で娘を生み、外に出ることのないまま、乳を与え、育てた。

さらに一年が過ぎた頃、大海人皇子は、土蜘蛛を束ねる鏡郎女に呼ばれ、箸墓の池の畔に来た。池に舟を浮かべ、皇子とただ二人向かい合った鏡郎女は、亜那を、ここより放つ、と告げた。

驚く皇子に、亜那が強く望むゆえ、と鏡郎女は笑った。鏡郎女は、生まれた娘は箸墓で土蜘蛛に育てる心づもりであったが、亜那は、娘を土蜘蛛にはせぬ、と言い張ったという。

――亜那の大功を思えば、認めぬわけにもゆかぬ、と鏡郎女は苦笑いした。しかし、すぐにというわけではない。

笑みをおさめて鏡郎女は言った。いずれ亜那には、一つだけしてもらわねばならぬことがある。それが済めば、亜那を箸墓より出そう。

大海人皇子は諾した。

そのころ、難波では、右大臣である蘇我石川麻呂は、大王家にも勝る蘇我の財を後ろ盾に権勢を振るっていた。豪族の権を削ぎ大王家の権を増そうとする豊日大王と、衝突することもしばしばだった。

葛城皇子は、石川麻呂を排斥するため、辛抱強く細やかな策を重ねて、蘇我一族の分裂を謀った。石川麻呂の異母弟である蘇我日向が、葛城皇子に与した。

年が明けて大化四年。三月になり、蘇我日向は大王に讒訴した。石川麻呂が、葛城皇子を弑殺せんと謀っている。詔が発せられ、石川麻呂は逆賊となった。

辛うじて難波を脱出した石川麻呂は、飛鳥に逃れ、自ら創建した山田寺に籠もった。寺の外は、飛鳥の留守司である中臣金の軍が取り囲んだ。さらに、蘇我日向を大将軍とする討伐軍が、難波から舟を連ねて川を遡り、飛鳥へと進む手はずになっていた。

そして、鏡郎女から亜那に、山田寺に忍び込み、討伐軍が着く前に石川麻呂を殺めるよう、命が下された。

山田寺に籠もる兵力は百に満たないが、寺の境内は広く、速やかに抵抗を終わらせるためにも、難波より討伐軍が着く前に石川麻呂の息の根を止め、主を失った一族の戦意を喪失せしめれば、軍を容易く終わらせ、あるいは避けることもできよう。互いに、犠牲は少なくてすむ。

鏡郎女はそう説いた。亜那は諾し、前日の夜、寝屋の天井に潜み、褥の裡で妻と烈しくまぐわい寝入った石川麻呂の喉笛に、踵を乗せて踏み砕いて、その命を絶った。傍らに添い臥す妻が気づかぬまに。

山田寺跡（奈良県櫻井市）

石川麻呂を殺めた後、亜那は、人けのない庫裏の天井に潜んだ。後は、難波よりの討伐軍が寺に攻め込むか、あるいは石川麻呂の一族が降伏するか、いずれにせよ混乱に乗じて抜け出せばよい。ぶじ抜け出せれば……大海人皇子との、幸多き日々が待っている。

亜那は、人を殺めることには慣れていた。蘇我石川麻呂は、罪なくして謀によって死ぬことになった。そのことを亜那は知らず、知らぬまま、ひたすら勤めを果たした。早く。亜那は、身の裡に高まってゆく思いを抑えることに心を奪われていた。早くここを出でて、大海人皇子のもとへ……。

庫裏の扉が開いた。多くの足音が入ってきた。亜那は、すばやく梁の上でうつぶせになり、下の様子を伺った。

入って来たのは、子の手を引き、あるいは赤子を抱えた女どもであった。

石川麻呂の妻や子らか……。

この時代、複数の妻を持つのは、珍しくはない。

亜那は素早く眼を走らせた。妻は八人、子は十二人か……。事の経緯を理解しえぬ童を除き、皆、眼を赤くし、袖で涙を拭う者もいる。

いよいよ軍）か。戦いに交われぬ女や童どもを、この庫裏に逃がしたのか。　亜那の推察は誤っていた。妻どもは、やにわに短剣を抜き、次々と己が子を刺し、ついで、自らの喉を突いて倒れた。

亜那は、豊かな髪の毛が、すべて逆立つのを覚えた。息を呑み、梁の上で身を起こした。

すでに庫裏の床には夥しい血に満ち、倒れ臥した妻や童どもの屍がそこかしこに転がっていた。

息をして立っていたのは、年の頃は二十歳ばかりか、裳裾にしがみつく女童の手を握りしめる女だけであった。女童は、眼前で繰り広げられた凄惨な光景に怯え、震えていた。母親は、女童に何事か言い聞かせ、短剣を抜いた。

「やめよ！」

亜那は、梁から飛び降りた。不意に現れた亜那に、母親は短剣を娘の喉に向けたまま、立ちつくした。

「汝が娘まで、殺すには及ぶまい！」

亜那は叫んだ。

「汝は……？」

母親は、やっと問うた。亜那は応えず、さらに叫んだ。

「殺すなかれ！」

亜那の眼から、涙が滴り落ちた。まだ三歳か四歳か。ふっくらと赤い頬。かぼそい小さな手で必死に母親にしがみつく女童を見やり、亜那は叫んだ。生きておれば、いずれ、恋もしよう、子も生もう。何故、ここで稚き命を絶つ。

「何者かは知らぬが……」

母親は、背を伸ばして立ち、威ある声を発した。

「吾は石川麻呂が娘にして、葛城皇子が妃、美濃津子」

葛城皇子の妃……。亜那は息を呑んだ。
「吾が父は罪なくして罪に問われた。吾が父を罠に陥れた者どもの前に跪き、許しを請うくらいならば、己が命を絶つ」
「否！」
亜那は、拳を握りしめて叫んだ。
「子が命まで絶つことはない」
「分からぬか！」
美濃津子は悲痛に貌を歪めた。
「この娘は、かの葛城皇子との間に産まれた子。かの皇子は、鞍作大臣を討った後、蘇我の者どもが抗うを恐れ、石川麻呂が娘たる吾に妻問いし、父との絆を結んだ。鞍作を討った後は、蘇我の財を奪うため、吾が父を陥れた」
総身をわななかせ、涙を流して美濃津子は叫んだ。
「かくも酷い皇子とまぐおうたは、吾が恥辱。葛城皇子の血を引くこの娘をも、生かしてはおけぬ……」
「子に罪はない！」
亜那は、床に座り込み、嗚咽しつつ叫んだ。
「葛城皇子とまぐおうたは汝。その子を産んだのも汝。その女童が、産めと頼んだのではない」
美濃津子は、慟哭する亜那を不思議な面持ちで眺めた。やがて、肩を落とし、悲しげな眼差しで笑みを浮かべた。

「汝は葛城皇子の手の者であろう。何故に、この子を救おうとする」
「吾は……」
十六歳の亜那は泣きじゃくりつつ、声を絞り出した。
「親に捨てられし子」

物音に貌を上げると、美濃津子はうつぶせに床に倒れ、短剣の突き刺さったその胸から血が流れ出していた。女童はその胴にしがみつき、揺さぶっていた。
亜那は、美濃津子に駆け寄り、叫んだ。
「何故に……」
恥辱にまみれても生きようとはせぬ。亜那はそう言いたかったが声にならなかった。己が子のために……。
「この娘の名は……」
うっすらと眼を開けた美濃津子は、呻いた。
「讃良……」
哀願する眼差しを向けられ、亜那は復唱した。
「ささら……」
美濃津子は頷き、瞼を閉じた。

半年が過ぎた。

亜那は、箸墓を出で、三十里（約15キロメートル）離れた、十市の邑にいた。
鏡郎女は、約束どおり、亜那が箸墓を去ることを許したのである。
「これより、汝が名は額田郎女となる」
畏まってそう告げる鏡郎女に、亜那は口の中で繰り返した。
ぬかだのいらつめ……。
額田部は、飛鳥の小豪族。汝は、額田部の長の娘とする。その上で、大海人皇子の妃となり、子を産んだこととする。さすれば、娘は、大王家の御子として、十分な扶助を得られる。すでに、葛城皇子も諾した。汝が娘は、皇女として十市の長が養う。汝も、十市の邸に、娘と共に暮らす。
この時代、大王家の御子は、小豪族が養い、御子は、その養い親の姓で呼ばれる。大海人皇子と、亜那との間に生まれた娘は、十市皇女と呼ばれることとなった。
その十市の長の邸に建てられた、十市皇女のための宮の小さな庭で、額田郎女となった亜那は、しゃがんで茂みに舞う蝶々を見つめる二歳の皇女の傍らにいた。
「ささら」
額田郎女は、山田寺で助けた美濃津子の娘、讃良を養い子として、皇女とともに育てていた。庭の片隅にうずくまり、俯いたまま動こうとはしない四歳の女童に、せいいっぱいの笑みを作って呼びかけた。
「ここへ来よ。蝶々が舞っている」
讃良は、ちらりと眼をやり、すぐにまた、細い膝を抱いて俯いた。
額田郎女は、立ちすくんだまま、何も出来ずにいた。

飛鳥の河辺宮にいる大海人皇子は、特に役職も与えられず、三日に一度は、十市に通ってくる。
「讃良は」
庭で、十市の女どもとはしゃぐ十市皇女と、茂みのそばでぽつねんとしゃがんでいる讃良を見比べて、皇子は問うた。
「未だ、あのように……？」
額田郎女は、悲しげに頷いた。
「幾度も声をかけ、慰めようとするのだが、応えず、眼も合わせない」
「口はきけるのか？」
「わからぬ」
「耳は？」
「聞こえるはず。物音がすればそちらを向く」
あるいは……郎女は、俯いて呟いた。吾の手が、血に穢れすぎているから？
讃良の祖父、蘇我石川麻呂を討ったのは、郎女であった。
「讃良は、山田寺で、かつてともに睦まじく暮らしていた一族が、自ら命を絶つのを見た。さらに、母が……」
郎女の眼が潤んだ。
「吾はやはり土蜘蛛。それに気づいているゆえに讃良は、吾に心を開こうとはしないのか？」
大海人皇子は、じっと讃良を見つめた。四歳の童女は、地を見つめたまま、その貌を微動だに

させず、石のように坐している。
ふと、大海人皇子は、袖から鞠を取り出した。
「幾日か前、難波の葛城皇子の舎人が来た」
讃良の実の父であり、祖父を討ち、母を死に至らしめたその名を聞いて、貌を強張らせる額田郎女を微笑みで制し、皇子は言った。
「暇ができたら、河辺宮のあたりで蹴鞠をしよう、それまでに舎人どもに蹴鞠を教えておけ、と兄なる皇子の言を告げた」
皇子は、蹴鞠を宙に放り投げ、落ちてくるところを膝で蹴り上げた。さらに、肩で、爪先で、額で、鞠を受け止めては再び宙に浮かせ、地に落ちぬよう、四肢を動かした。
十市皇女が駆け寄り、歓声をあげた。皇子は、巧みであろう？　と言いながら、鞠を浮かせ続けた。
いつしか、讃良が貌をあげ、皇子と鞠を見つめていた。
皇子が鞠を蹴りそこね、庭を転がり、讃良の足下に達した。讃良は鞠を手にとり、見つめた。
「や、仕損じたり」
皇子は、讃良に歩み寄り、鞠を賜れ、と微笑んで手を差し出した。讃良は、鞠を両手で抱えたまま、じっと皇子を見つめた。皇子は手を差し伸べた。讃良は、鞠を抱きかかえ、唇を引き結んだ。
「讃良は、その鞠が気にいったか」
皇子は、手を引っ込め、讃良の頭を撫でた。讃良は首をすくめ、身を固くした。

「案じるな。その鞠は、汝のもの」
もうひとつある……。皇子は、袖から別の鞠を取り出し、爪先で高く蹴り上げた。

その後、讃良は、大海人皇子が訪なう度に、常には石のように固まったままの面差しが、輝き弾けるようになった。
皇子が庭で蹴鞠の芸を見せていると、近寄ってきてじっと見つめた。皇子が来ぬ日は、ひたすら鞠を見つめ、床で転がし、庭で蹴った。二歳下の十市皇女がよちよちとおぼつかなぬ足取りで鞠に近づくと、邪険に追い払い、時には泣かせた。
「まるで……」
年明けも間近な夜、寝屋の裡で、訪なってきた皇子に添い臥しつつ、額田郎女は笑った。
「讃良は、皇子を恋うておるような」
「吾も」
皇子は言った。
「讃良を吾が娘のごとく、十市皇女と同じく、慈しみたい」
「そうではない」
額田郎女は、面持ちを引き締めた。
「讃良はまるで、美まし男を慕う乙女のように、皇子を恋うている」
まさか四歳の女童が、と笑う皇子に、郎女は言った。
たとえ稚なくとも、男を恋うる心は同じ、と。

妬(ねた)んでいるのか？
妬ましい。
傍らで寝入る十市をちらりと見遣り、郎女は皇子に覆い被さった。
その隣室で、乳母とともに寝入ったはずの讃良が、褥から這い出し、耳をそばだてているのにも気がつかず。

年が明けた。
西の長門(ながと)から白い雉(きじ)が献じられ、百済(くだら)から渡ってきた僧どもがこれぞ吉兆と讃え、王宮の庭に放たれた。元号は、大化から白雉(はくち)に変えられた。
「民の怨嗟(えんさ)の声は高まりつつある」
葛城皇子は、訪なってきた中臣鎌子に言った。大化二年、豊日大王は詔を発し、豪族の私有する土地を大王家のものとし、大王家から各豪族の功績に応じて食封(ひとえ)を与える、と宣言した。食封とは即ち土地のことである。この詔は、多くの豪族の反発を招いた。さらに、己の地位を高めるため、自らの功を過大に言い立て、または他の豪族を誹謗する輩が後を絶たず、禍根を残した。
さらに大王は、難波の長柄宮(ながらのみや)を、板蓋宮(いたぶきのみや)に倍する広さのものに建て直すと宣し、各地から民を徴発し使役した。各地の邑々は困窮した。
「それゆえ、吉兆を並べ立て、賑やかに民心を振るわせようというのであろう。かの大王らしい、姑息なやりようよ」
「長門から献じられた白雉」

鎌子は笑みもせずに言った。
「日を経るにつれ、白い染料が剥げ、いまは斑雉(まだら)との噂」
「その噂、さらに振りまけ」
二十四歳になった葛城皇子は、遠くを見つめつつ言った。
「急(せ)くことはない。時をかけ、吾等が謀(はかりごと)、確かになしとげようぞ」

同じ頃。
大海人皇子は、難波の宮での年賀の式から飛鳥へ還り、河辺宮に入る前にまず十市の邑を訪なった。
馬を下りて門をくぐると、十市の一族が出迎えるなか、艶やかに身を飾った額田郎女が十市皇女を抱いて微笑んでいた。
その人垣から飛び出し、皇子の袴の裾にしがみつく者があった。
「讃良か」
皇子は腰をかがめ、その貌をのぞき込んだ。讃良は、唇を引き締め、眼を大きく見張り、にらむように、何かを訴えるように、見返していた。
「新しい鞠だ」
その眼差しに戸惑った皇子は、袖から鞠を取り出し、讃良の眼の前に差し出した。讃良は両手を皇子の裾から離し、鞠を受け取った。
「十市皇女にも、鞠を持ってきた」

姉妹ともども、仲良く鞠を蹴って遊べ。微笑みつつ、母の胸から庭に降り立った十市皇女に歩み寄った皇子の脚に、ぶつかるように讃良が駆け寄った。皇子が、十市皇女に差し出した鞠を奪い取り、投げ捨てた。皇女は烈(はげ)しく泣き出した。

「讃良！」

叱りつけた額田郎女を、讃良は睨み返した。額田郎女は思わず、その頬を打った。讃良は、手を伸ばして、郎女の頬を打ち返し、踵を返して再び皇子の裾にしがみついた。しがみついたまま、離そうとはしなかった。